

# 千刈狸の呟き

## ～ 原発事故の行方を思う ～

映画「ジュラシックパーク」では、高圧電流が流れる電気柵でコントロールされていた恐竜たちが、ハリケーンによる停電を機に人間を襲う。今、国民の誰もが成り行きを心配している福島第一原子力発電所の事故と同じ構図である。人間は制御できると思っていた恐竜／原発に手ひどいしっぺ返しを受けたのだ。

国と電力会社は東日本大震災の規模が未曾有で想定外であったとして、原発事故を天災のせいにしたいようだが、1000年余り前の貞観大地震では、今回と同じ規模の津波が発生した記録と地形的痕跡があるというから、決して未曾有ではなく、想定が甘かっただけなのだ。地震のマグニチュードが当初発表の8.8から9.0へと何の説明もなく格上げされたのも、地震がより巨大であった、つまり事故は避けがたかったと強調したいのではと勘ぐりたくもなる。

原発事故の恐ろしさは、厄災の規模が桁外れに大きく広範囲に及ぶこと、そして被害が気が遠くなるほど長期間にわたることである。だからこそ、原発事故は決してあってはならないことであり、絶対安全ということがあり得ない以上、地震国日本で原発を作るのは危険とかねてから言われ続けてきた。しかし、スリーマイル島事故、チェルノブイリ事故と2度にわたる原発大事故を目にして、国は原子力政策を見直すことなく、我が国の原発は安全と言いつのり、反対運動を圧殺して原発の建設を推し進めてきたことは周知の事実である。二度の大事故は対岸の火事ではなかったのである。原発が安全とは思っていなかったが、まさか狸の存命中にわが国でこのような事故が起ころうとは思ってもよらなかった。多くの国民も同じ思いであろう。結果、日本は大量の放射性物質を垂れ流した環境汚染国として歴史に汚名を残すことになったのだ。

そもそも東京電力の原発をなぜ東北電力管内の新潟や福島に作り、長い距離を送電ロスをかけてまで東京へ電力を供給しなければならなかったか。当事者たちが、原発が安全でないことを百も承知していたからにはほかならない。そして今、福島で大事故が発生するに至って、安全でクリーンと宣伝されてきた（オバマ大統領は地震後もまだそう言っている）原発が、危険でダーティであることが誰の目にも明らかになったのだ。事故の現状とこれから先の処理を思うとき、原発がとんでもない疫病神であると気づくのに支払った代償はあまりに大きいと言わざるをえない。福島第一原発は廃炉の方針だそうだが、通常運転の原発でさえ処理終了まで数十年かかるとされるのに、放射能まみれの事故原発ではさらに多くの時間を要するだ

ろう。

さて、環境、飲料水、農水産物に広がる放射能汚染がこれからどうなるか大変懸念されることである。放射線が我々の五感でとらえられないだけに、なおのこと不気味である。放射線医学をろくに学ばなかった狸は詳しいことは知らぬが、安全基準は放射線の急性障害、ことに外部被爆を念頭に設定されたものであって、晩期障害には閾値がない、と教わった気がする。内部被爆の影響も実のところよくわかっていないとのこと、被爆は可能な限り避けるべきなのだ。官房長官や御用学者は、ことさらに「安全」「ただちに健康に影響を及ぼすレベルではない」と強調するが、銜の如く同じ事を言われるほどに国民の不信感はそのばかりである。福島に官邸機能を移すくらいのことをしないと国民は安心しないだろう。

原発事故が発生してまもなく、原発周辺からヨウ素<sup>131</sup>、セシウム<sup>134</sup>が検出されたことが報道されたが、当然、猛毒と恐れられるプルトニウムも炉心から漏れ出ていたはずである。ことに福島原発3号機はMOX燃料を使っているのも、多量のプルトニウムが放出されている可能性が大きい。しかし、これについての発表はしばらくの間、狸の知るところ全くなかった。ようやく原発周辺でプルトニウムがわずかに検出されたと発表されたのが、事故発生から3週経過した3月29日である。かねてから東京電力の事故隠し・データの改竄はつとに有名であったから、やはりという思いである。発表内容は常に疑ってかかるのが賢明であろう。

わが秋田県は、今般の地震で構造物にさしたる被害がなかったが、丸一日に及び停電によって、電力に頼り切った私たちの生活基盤の脆さを思い知らされることになった。深夜電力の活用など電力会社は盛んに需要を煽ってきたが、その大半を原発が担っていることを知れば、便利だからと喜んでばかりもいられない。必要以上の電力を無駄に使っていないか、私たちの生活を今一度見直す必要がある。また薄気味悪さを感じつつも、電力需要を賄うには原発が必要と刷り込まれてきた私たちの意識も改めて問い直されるべきである。

地震・津波被害からの復興、原発事故の処理を国は総力を挙げて行うとしている。それはそれで結構だが、これから「ニッポン、ニッポン」の大合唱が席卷して異論を許さないような風潮がはびこることを狸は懸念する。この難局を乗り切るためには、強力な政府機能が必要だとして、民主党と自民党の大連立を構想する向きもあるが、戦前の大政翼賛会にも似て、危なっかしさを感じるのは狸の杞憂だろうか。 (やせ狸)